http://dx.doi.org/10.20404/jscau.2016.02.40.17

現代日本語の動詞条件形の脱動詞化*

－動詞条件形「すれば」「すると」の形をとる場合－

河 在 必**
hajp75@gmail.com

〈 目 次 〉

1．序論
1.1 本稿の目的
1.2 先行研究
1.3 研究対象及び研究方法
2．本論
2.1 脱動詞化するときの特徴
2.2 語彙別脱動詞化した用法
2.3 脱動詞化の全体像
2.4 脱動詞化した用法と構文的特徴
3．結論と今後の課題
3.1 結論
3.2 今後の課題

Key word : 文法化(grammaticalization)、語彙化(lexicalization)、動詞件形(verbal conditional form)、動詞化(deverbalization)、一方向性(unidirectionality)

1．序論

1.1 本稿の目的

一般的にいえば、現代日本語の動詞条件形は、基本的に、複文において従属文の動詞述語がとる語形である。従属文の述語は、条件形をとることで、従属文にさしだされる出来事が主文にさしだされる出来事の成立にかかわる≪条件≫(広義の因果関係)であることを表す。代表的な形式として、

* This work was supported by the National Research Foundation of Korea Grant funded by the Korean Government (NRF-2012S1A5B5A07037108)
** 韓国外国語大学　日本語通翻訳学科　非常勤講師、現代日本語文法

www.kci.go.kr

「するなら」「したなら」「したら」「すれば」「すると」の形があげられる。

しかし、発話活動を表す動詞「いう」をはじめ、いくつかの動詞が「すれば」「すると」の形をとる場合、文法的な機能を果たす形式や話し手の述べ方を表す表現として使用される。このような用法では、動詞条件形は語彙的な意味・機能・形態において、本来の動詞らしさを失っている。

具体例をあげながら、本研究で取り扱う現象について説明する。以下の例1～4を見ていただきたい。形式的には、「いえば」「いうと」の形が使われているが、これらの形式は、例1、2では、典型的な動詞条件形の用法として、例3、4では、動詞らしさを失った用法として使用されている。

1) 羊飼いの少年が「おおかみだ」と**いえば**、村人は助けに来るだろう。(作例)
2) 羊飼いの少年が本当のことを**いうと**、村人は怒り出した。(作例)
3) おおかみと**いえば**、羊肉が好きだ。(作例)
4) 本当のことを**いうと**、少年は嘘つきだ。(作例)

まず、動詞条件形が典型的な動詞条件形として使用される場合(本動詞の用法)に確認できる特徴について述べよう。文の構造からいえば、例1、2はともに二つの事象がさしだされている複文である。この複文において「いえば」「いうと」は、語彙的には発話活動を表しており、従属文の述語として機能している。そして、羊飼いの少年の発話活動が、村人が助けにくること、村人が怒り出したことの≪条件≫になることを表している。「いえば」「いうと」は、従属文の述語として機能しているから、例5～7のように、極性・アスペクト・ヴォイスの文法的なカテゴリーにそった語形変化も可能である。

5) 羊飼いの少年が「おおかみだ」と**「いわなければ」**、村人は助けに来なかっただろう。(作例)
6) 羊飼いの少年が本当のことを**「いっていれば」**、村人は助けに行っただろう。(作例)
7) 羊飼いの少年に本当のことを**「いわれると」**、村人は怒り出した。(作例)

また、動詞条件形の「すれば」「すると」の形の間には文法的な使い分けが

www.kci.go.kr

あって、例6，7の「いっていれば」「いわれると」を「いっていると」「いわれれば」に言いかえることはできないか、できるとしてもその意味が変わってしまう。

次に、動詞条件形が動詞らしさを失った場合に確認できる特徴を簡略に述べる。例3、4の「いえば」「いうと」の場合、語彙的な意味は希薄化しており、対応する主語はなく、従属文の述語として機能しない。語形が固定され、文法的なカテゴリーにそった語形変化をしない。また、単語としての自立性を失って、他の形式に後接した形で用いられる。最後に、このくみあわせ全体が「おおかみは」「本当は」相当のひとまとまりの形式となって機能する。

このように、動詞が本来の動詞らしさを失って、派生した用法として使われることは、実質語が機能語に変化する≪文法化≫、別の語彙目録に編入する≪語彙化≫の現象にあたる。そして、動詞らしさを失った別のカテゴリーに移ることから、両現象をまとめて、≪脱動詞化≫とも呼ぶことができる。

このように動詞条件形の用法に、本動詞の用法と脱動詞化の用法があることは、すでに高橋(1983、2003)などの研究に指摘されており、よく使用される形式の意味・用法については、松木・森田(1989)、グループ・ジャマシイ(1998)などに取り上げられている。最近では、「みる」「いう」「おもう」などの動詞の「すれば」「すると」の形を対象とした、河(2012a、2012b、2013、2014a、2014b、2015)といった一連の研究があげられる。

しかし、従来の研究は、特定の現象や特定の動詞の条件形を対象にした研究、または、特定の形式だけの意味・用法の説明がなされている。そこで、本稿では、筆者の研究成果をまとめながら、次の3点に注目して述べたいと思う。

(1) 脱動詞化に伴われる語彙面・形態面・構文面の変化の一般性
(2) 脱動詞化のバリエーションと脱動詞化の全体的な経路
(3) 脱動詞化の用法とその発展に関わる構文的な特徴

www.kci.go.kr

1.2　先行研究

動詞条件形をめぐっては、動詞条件形の認定、条件形の意味・用法、条件形の体系的な記述など、様々な問題を解決するために、数多くの研究がなされている。本稿では、紙幅の制限のため、本研究の立場となる研究の紹介と動詞条件形の脱動詞化を扱っている研究を紹介する。そして、一般言語学で注目されている≪文法化≫、≪語彙化≫について簡略に紹介する。

1.2.1　動詞条件形の体系と脱動詞化の中心的な形式

現代日本語における動詞条件形の意味・用法、形式間の使い分けなどをめぐっては、国立国語研究所(1964)、山口(1969)、鈴木(1972)、言語学研究会・構文論グループ(1985a、1985b)、奥田(1986)、高橋(1983、2003)、益岡編(1983)、前田(2009)などの研究がなされている。

上記の研究のなかで、本研究は、言語学研究会・構文論グループの一連の研究と奥田(1986)の枠組みに従っている。これらの研究の特徴は、動詞条件形を体系的にとらえようとするところにある。奥田(1986)には、次のような枠組みがあげられている(網掛けは筆者によるもの)。

	原因的な つきそい・あわせ文	条件的な つきそい・あわせ文	契機的な つきそい・あわせ文
対象の論理	するので	すれば	すると
私の論理	するから	するなら	したら

奥田(1986：11)

ここで注目されたいのは、これらの形式のうち、≪対象の論理≫の系列に属している「すれば」「すると」の形が脱動詞化の中心的な役割を果たしていることである。一方、≪私の論理≫の系列に属する「するなら」「したなら」「したら」の形の場合、脱動詞化の用法は、非常に制限されている[1)]。

1) 「したなら」の形から脱動詞化する用法はみられない。「するなら」「したら」の形からは脱動詞化した用法が確認されてはいる。しかし、その多くが「すれば」「すると」の形に言いかえることが可能で、本来の動詞条件形の用法にみられる文法的な使い分けはなくなっている。

www.kci.go.kr

1.2.2　脱動詞化した用法に関する研究

動詞条件形から脱動詞化したいくつかの形式の意味・用法については、松木・森田(1989)、グループ・ジャマシイ(1998)などの複合辞、文型に関する文献から確認できる。よく使われる形式を中心にその意味・用法が説明されていて、日本語学習者にとっては役立つ資料であると評価できる。

一方、動詞が動詞らしさを失う、動詞の転成については、高橋(1983、2003)に記述されている。高橋は、動詞の転成における3つの特徴を指摘している。①名づけ的な意味が変わる、②機能の変化や固定化が起こる、③形態論的なカテゴリーのシステムが変わる(高橋2003：260-262)。そして、高橋は動詞の条件形から、後置詞、陳述副詞、接続助辞が発達することを述べている。

1.2.3　≪文法化≫と≪語彙化≫

一般言語学的な観点からいえば、本研究で扱っている動詞の条件形の脱動詞化は、≪文法化≫と≪語彙化≫の現象にあたる。

まず、本稿でいう≪文法化≫とは、語彙的な要素や構文が文法的な機能を果たすために、ある言語的なコンテクストに入ってくる過程のことである(Hopper and Traugott 2003)。実質語(content word)が機能語(function word)に変化することを指したりもするが、いったん文法化が起こって、実質語が機能語に変わると、そこからさらに別の機能を果たす機能語に発達したりもする。

次に、本稿で言う≪語彙化≫とは、ある言語的な存在が慣用化され、ある語彙目録(lexicon)に編入したり、文法による生産的なルールから離脱したりする現象をいう(Brinton and Traugott 2005)。動詞条件形からは、形式的な面からいって、二つ以上の形式からなっている複合的な表現もあれば、複合的な表現を構成する要素間の境界がなくなって単一語になっている表現もある。たとえば、「今」に「思えば」が接続した「今思えば」や「本当のことをいうと」から発達した「ほんというと」などがその例がある。

具体例は本論で確認するが、動詞条件形から脱動詞化する場合、後置詞、接続助詞、接続詞へ発達する文法化の現象と話し手の態度を示す陳述

www.kci.go.kr

副詞へ発達する語彙化の現象を確認することができる。

1.3　研究対象と研究方法

1.3.1　研究対象

本研究で取り扱う動詞は、高橋(1983)、言語学研究会・構文論グループ(1985b)、小泉編(1989)などの文献を参考にして選びだした。研究対象となる動詞は、以下の20項目で、本稿では、そのうち、網掛けをした4つの語彙の「すれば」「すると」の形を分析した結果をまとめる。この4つの語彙は、その使用頻度及び用法のバリエーションを考慮して決めている。

あげる、いう、いく、おもう、かかる、かぎる、かける、かんがえる、きく、くらべる、くる、したがう、しらべる、する、そう、とる、なる、のべる、みる、よる

(あいうえお順)

1.3.2　研究方法

以下では、研究方法として、本研究で使用する研究資料と研究対象の分類における観点について説明する。

まず、研究資料には、戦後発表された文学作品、『CD-ROM版新潮文庫の100冊』『CD-毎日新聞データ集』(1991～2006年)といった電子化資料を使用する。本稿で扱う形式の量的分布は〔表1〕のようになる[2)]。

2) 「みる」「いう」の場合、『CD-毎日新聞データ集』の中で、分析に使用した1991年度分のみの数値である。なお、用例収集の際、「みる」「見る」「観る」「診る」「看る」「いう」「言う」「云う」「謂う」「おもう」「思う」「想う」「あげる」「挙げる」「上げる」「揚げる」といった表記上のバリエーションを考慮に入れており、これらの動詞が「すれば」「すると」の形をとっている場合を収集している。

www.kci.go.kr

<表1> テクストタイプ別・語形別量的分布

	みる		いう		おもう		あげる		合計
	みれば	みると	いえば	いうと	おもえば	おもうと	あげれば	あげると	
文学作品	222	475	833	875	160	1,332	5	37	3,939
毎日新聞	513	672	1,868	548	4,340	8,467	742	858	18,008
合計	735	1,147	2,701	1,423	4,500	9,799	747	895	21,947

次に、分類の観点について述べる。本稿では、動詞の「すれば」「すると」の形が、本来の動詞条件形として使用されているか、あるいは、脱動詞化した形式として使用されているかに注目して用法を分ける3)。そして、脱動詞化した場合、「すれば」「すると」の形は、基本的に、単語としての自立性を失って、ほかの単語にくっつく。本研究ではこのことに注目して、「すれば」「すると」の前接要素に注目したうえで、その用法を分類する。理解を助けるために、「みれば」の形の分類を例として<表2>をあげる。

<表2> 動詞条件形の用法の分類の一例

「みれば」の用法	
A．≪動詞条件形の用法≫ a1.≪中心的な条件形の用法≫ ・屋上から下を**みれば**、太郎は怖くなるだろう。 a2.≪周辺的な条件形の用法≫ ・屋上から下を**みれば**、多くの人が歩いていた。	B．≪動詞条件形の脱動詞化の用法≫ b1.≪後置詞化≫ ・親から**みれば**、太郎はかわいい息子だ b2.≪副詞化≫ ・一般的に**みれば**、寒い国の人は早口だ。

分析対象となる形式が従属文の述語として使用されているか否かで、≪動詞条件形の用法≫(A)と≪動詞条件形の脱動詞化の用法≫(B)に分かれる。

≪動詞条件形の用法≫は、動詞条件形が従属文と主文にさしだされてい

3) 用例を収集する段階で「するなら」「したなら」「したら」の形の場合も収集し、用法を確認する。そのほとんどは、本動詞の条件形の用法で、脱動詞化した用法があっても、分析するには少ない。

www.kci.go.kr

る事象を因果関係でむすびつけているか否かによって、≪中心的な条件形の用法≫(a1)と≪周辺的な条件形の用法≫(a2)に分かれる。≪周辺的な条件形の用法≫の場合、主文の事象は従属文の事象の成立にかかわりなく成立している。

一方、従属文の述語として機能しない、≪動詞条件形の脱動詞化の用法≫が本研究の対象となる。このタイプの用法では、「すれば」「すると」の形をとる形式は、語彙・機能・形態において、本来の動詞らしさを失っている。

分析にあたっては、条件形の前接要素の形式及び意味的なタイプ、述語の意味的なタイプ、文の形式的・意味的構造、文レベル・テクストレベルでの機能などに注目する。

2. 本論

序論では、動詞条件形には、典型的な条件形としての用法ばかりでなく、動詞らしさを失った用法があることを確認しながら、本稿の目的を述べた。

以下、本論では以下の4つのことを中心に述べていく[4)]。本動詞の用法と脱動詞化の用法との比較を通して、脱動詞化するときの特徴を確認し(2.1)、どのような動詞の条件形からどのような用法が派生するか、そのバリエーションを確認する(2.2)。そして、脱動詞化の用法がどのように展開しているか、その全体像を描く(2.3)。最後に、代表的な例をあげながら、脱動詞化の用法を確認し、用法の発展にかかわる構文的な特徴を指摘する(2.4)。

2.1 脱動詞化するときの特徴

1.1では、発話動詞「いう」の「いえば」「いうと」の形が本動詞の条件形とし

4) 動詞条件形が脱動詞化する場合、動詞それぞれの用法において興味深い現象がみられる。しかし、本稿ではなるべく全体像を描くことを目標にするため、動詞個別の現象については、河の一連の研究を参考にしていただきたい。

www.kci.go.kr

て用いられる場合を代表例としてあげながら、次のようなことを確認した。①文の構造は二つの事象がさしだされる複文であること、②動詞の語彙的な意味が生きていること、③条件形が従属文の述語として機能すること、④文法的なカテゴリーにそった語形変化が可能であること、⑤条件形の間に文法的な使い分けが存在することである。

ところが、動詞条件形が脱動詞化すると、文の構造をはじめ、条件形の語彙・機能・形態、条件形の使い分けなどの面において変化が起こる。それをまとめると、<表3>のようである。

<表3> 本動詞の用法と脱動詞化の用法の比較

	本動詞の用法	脱動詞化の用法
文の構造	二つの事象がさしだされる複文	単文へ移行する(移行しつつある)
主文の述語のタイプ	動詞述語が中心的	動詞述語だけでなく、名詞述語・形容詞述語も使われる
語彙的な意味	語彙的な意味を保っている	語彙的な意味が抽象化・希薄化される
形態論的特徴	文法的なカテゴリーにそった語形変化が可能	語形が固定される
条件形の使い分け	動詞条件形の意味・用法上の違いが存在する	意味・用法上の違いがほとんどなくなる

また、高橋(1983：310)の指摘のように、類義語の関係に変化が起こる。たとえば、その語彙的な意味が一般的な「みる」は、本動詞の用法の場合、「ながめる」「のぞく」のような類義語に言いかえることができる。しかし、脱動詞化してしまうと、本来の語彙的な意味に変化が起こるため、言いかえはできなくなる。

2.2 語彙別脱動詞化した用法

動詞条件形が脱動詞化する場合の用法をみると、後置詞、接続助詞、接続詞、複合的な陳述副詞、陳述副詞として使用されていることが確認できる。今まで確認した用法を<表4>で示すと以下のようになる。

www.kci.go.kr

<表4> 動詞別脱動詞化用法の一覧

もとになる動詞 / 脱動詞化用法	みる	いう	おもう	あげる
後置詞	○	○	○	○
接続助詞	—5)	○	○	—
接続詞	—	○	○	○
複合的な陳述副詞	○	○	○	○
陳述副詞	○	○	○	—

<表4>から、次のようなことがいえる。

①動詞によって、脱動詞化した用法のバリエーションが異なる。

②脱動詞化の用法のバリエーションは、複数が存在しており、単一の用法にだけ発展する場合はみられない。

③いずれの動詞条件形からも後置詞と複合的な陳述副詞の用法が生まれてくる。

2.3 脱動詞化の全体像

「みる」「いう」「おもう」「あげる」の「すると」「すれば」の形から発展する経路をまとめると、<図1>のようになる。これらの経路は、≪文法化≫と≪語彙化≫の観点を取り入れて分類することも可能である6)。

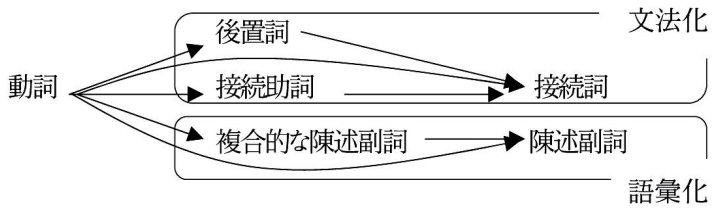
たとえば、後置詞、接続助詞、接続詞のように、構文要素間、または、テクストレベルでの文の間の関係づけのために発達する場合が≪文法化≫する場合で、複合的な陳述副詞、陳述副詞のように、話し手の述べ方を表すために発達する場合が≪語彙化≫の場合にあたる。

---

5) 松木・森田(1989：82)では、「みると」「みれば」が同時性を表す接続助詞としての用法をあげている。しかし、用例出典をみると、1897年度に発表された国木田独歩の『武蔵野』からの例である。調査が足りないせいか、まだ「みれば」「みると」が接続助詞として使用された例は確認できていない。今のところ、類義形式「おもえば」「おもうと」との競合に負けた結果とみているが、今後通時的な調査を進める必要があると思われる。

6) <図1>から文法化と語彙化の境界が分けられることを言おうとしているのではない。今のところ、「いえば」「いうと」の例から後置詞化してから陳述副詞化していると思われる場合がある。しかし、ここでは扱いきれないので、この現象については、稿を改めたい。

www.kci.go.kr



<図1> 脱動詞化の経路

<図1>から次のようなことがいえよう。

①動詞条件形の脱動詞化から、文法化と語彙化、両現象が確認できる。

②全体的な派生経路をみると、動詞条件形は、接続詞と陳述副詞へ向かって発達していく。

③派生経路(→で示すもの)は、一方向性(unidirectionality)をもっていて[7]、逆方向に遡ったりはしない。

<図1>に示したように、脱動詞化は大きく、文法的な機能を果たす形式に発達する文法化の経路と文の内容に対する、あるいは、文を述べるときの話し手の態度を示す表現となる語彙化の経路に分けることができる。

ところで、動詞条件形が動詞らしさを失った結果とはいえ、これらの用法の底辺には動詞条件形の文法的・意味的な性格が残されている。ここでいう文法的な性格とは、条件文における条件形の構文的な機能の側面で、意味的な性格とは、条件文の使用に内在している意味的な側面である。

すでに述べたように、動詞条件形は複数の事象間の関係づけのために用いられる。複文の中での≪関係づけ性≫は、接続助詞化しても残り、さらに進んで、先行する文との関係づけがなされ、接続詞化しても保持される。

一方、条件文は「こういうことになるとこういう結果になる」「ああいうことになるとああいう結果になる」のような、現実に起こりうる複数の可能性

7) 厳密には、通時的な調査から各用法の成立を追う必要がある。本稿では、文の構造が単純化していく特徴に注目して、上記のような経路をたどっているのではないかとみている。

www.kci.go.kr

を述べている。言いかえれば、条件文を述べるとき、話し手は複数の事象のなかから原因となる一つの事象をえらびだし、その事象＝原因によってどういう結果が起こるのかを述べる。それで、条件文には、文には現れていないが、含みとして原因になりえる複数の事象が存在し、話し手がその中から一つをえらびだしたという意味が伴われる。この「複数の事象から話し手が一つをえらびだす」という性質を≪えらびだし性≫とすれば、この≪えらびだし性≫は後置詞化、陳述副詞化した用法に残されている。

2.4　脱動詞化した用法と構文的特徴

本節では、2.3で確認した経路別にその具体例を、その意味・用法をまとめながら、用法の発展にかかわる構文的な特徴を指摘する。

2.4.1 ≪後置詞化≫する場合

本研究では、鈴木(1976)にしたがって、≪後置詞≫を「単独では文の部分とはならず、名詞の格の形(およびその他の単語の名詞相当の形式)とくみあわさって、その名詞の他の単語に対する関係をあらわすために発達した補助的な単語である(p.499)」と規定する。

動詞条件形から≪後置詞化≫する現象は、「みる」「いう」「おもう」「あげる」の「すれば」「すると」の形の用法から確認できる。各動詞の条件形がどのような形式の名詞に接続するかをみると、<表5>のようになる8)。

<表5> 動詞条件形の接続する名詞の形

	みる	いう	おもう	あげる
～を	○	○	○	○
～から	○	○	—	—
～で	○	○	—	—
～と	—	○	—	—

8) <表5>から確認できる形式的なパターンのなかで、後述する判断・評価の立場や材料の限定を表す「～からみると」「～からいえば」のように、その形式と意味が類似している場合は、条件形の間に言いかえが可能である。しかし、ほとんどの場合、接続する名詞の形が共通していても、その意味・用法が異なっていて、言いかえることはできない。

www.kci.go.kr

以下、主要な意味・用法をあげながら述べていく。

①≪判断・評価の立場≫、≪判断・評価の材料≫の限定

「みると」「みれば」「いうと」「いえば」が「～から」「～で」「～を」9)の形の名詞とくみあわさった形で用いられる。後置詞化した形式とくみあわさる名詞のタイプによって、判断・評価の立場を示したり、材料を示したりする。

8) 戦は、私**からみれば**羨ましいような男であった。(三浦哲郎『忍ぶ川』)

9) 一か月もせぬうちに荻江は三軒の内職先を見つけてくれた。/「どれも良家で、今の家庭教師の相場**からいうと**かなり良い方です」

(渡辺淳一『花埋み』)

②≪主題のなげかけ≫

「～というと」「～といえば」の用法で、先行する文の内容からある物事をえらびだして、そこから連想されることを述べるときに用いられる。

10) 北辰病院の関場不二彦**と言えば**、だれも知らぬ者のないほど有名である。

(三浦綾子『塩狩峠』)

③≪後述する内容≫の限定

「～をいえば」「～をいうと」が、「私的なこと」「古いこと」「本当のところ」などのパターンに接続し、後述する内容の性格を限定する。

11) 私的なこと**を言えば**、私が社長在任時代、二回の石油ショックによる商社冬の時代を迎え、安宅産業合併などがあったが、陰ながら激励を受け、勇気づけられました。 (毎日新聞910403・経済面)

9) 名詞の「を」の形に接続するのは、「みれば」「みると」のみ。

www.kci.go.kr

③≪比較の基準≫の限定

「～をおもうと」「～をおもえば」の用法で、述語には、主に程度を表す形容詞述語が用いられながら、二つの物事を比較するときの基準を示す。

12) 雑誌などで宣伝すること**を思えば**、インターネットは費用対効果の面でメリットが大きい。(毎日新聞020624・朝刊家庭面)

④≪集合≫の限定

「～をあげると」「～をあげれば」の用法で、あるカテゴリーに属するものを列挙するときに用いられる。「～をあげると」「～をあげれば」は、その前後のものを≪集合≫とその≪要素≫の関係にむすびつける。

13) 日本発の物**を挙げると**、アニメ、ヘッドホンステレオ、カラオケなどたくさんあります。(毎日新聞011228・特集面)

2.4.2　≪接続助詞化≫する場合

本稿でいう≪接続助詞≫は、「し」「から」「ので」「が」「けれども」のように従属文の述語に接続して、その述語を含む文と、それに続く主文との関係を示すものである。動詞の条件形から≪接続助詞化≫する場合、「いう」「おもう」の「すれば」「すると」の形から確認できる。

「いう」「おもう」の例から接続助詞が発達する要因としては、これらの動詞の場合、その発話内容、思考内容を表す引用節が伴われていることがあげられる。つまり、「いう」「おもう」の条件形が従属文の述語でなくなった結果、前後の構文要素間の関係づけのための機能を果たすようになるのだが、そこで、引用節の要素が文相当の場合、その述語が従属文の述語となる。それで、「いう」「おもう」の条件形から発達した形式が前後の文をむすびつける接続助詞となる。

「いう」「おもう」から発達した接続助詞の形式には、「～(か)というと」「～(か)といえば」「～(か)とおもうと」「～(か)とおもえば」がある。

「～(か)というと」「～(か)といえば」の場合、注目されたい情報を疑問文の

www.kci.go.kr

形式で知らせたうえで、その情報を続いて述べるときに用いられる(例14)。または、従属文の部分が結果・結論となることを表し、「～というと」「～というえば」に後続する主文は、その結果を引き起こした原因・理由、その結論がよりどころにする根拠を表す(例15)。

14)「だが、今の時点でも、人々が何を見るか**といえば**、地震関係のニュースだよ。(後略)」 (西村京太郎『21世紀のブルース』)
15) チェルノブイリでソ連は、汚染されたものを捨てるかと思ったら、全部収穫した。それがなぜか、トルコを通って、第三世界へ輸出されていく。なぜ第三世界が狙われるか**というと**、検疫制度がお粗末で、ほとんどないといってもいいからです。 (井上ひさし『コメの話』)

「～(か)とおもうと」「～(か)とおもえば」は、二つの出来事が時間間隔のなく、継起的に起こった場合(例16)、ある持続的な出来事が途中で断ち切られ、それに対立する、話し手にとっては意外な出来事が起こった場合に用いられる(例17)。ここで注意しなければならないのは、従属文にさしだされる出来事は、思考活動の内容でなく、聞いたり、見たりして捉えた現実の出来事である。

16)「今、助けるぞ！」/と、声がした**と思うと**、ドアに体当たりしてぶつかる音がした。 (赤川次郎『秘書室に空席なし』)
17) 翌日まで南嶽はひと言も口をひらかなかった。大いびきをかいて苦しそうに咽喉をならしていた**かと思うと**、それが急にとまって息をしなかったりした。 (水上勉『雁の寺』)

2.4.3 ≪接続詞化≫する場合

鈴木(1972)では、「接続詞は、陳述副詞と同様、素材的な意味をもたず、もっぱら陳述的な意味だけをあらわす。ふつう、文のはじめにあって、まえの文とその文との関係をしめす。文の部分としては、独立語になる(p.493)」と規定している。「そして」「だから」「しかし」などの単一形式もあるが、「いずれにせよ」「とはいうものの」のような二単語起源、三単語起源の

www.kci.go.kr

形式もある。

動詞の条件形から≪接続詞化≫する経路は、今のところ、3つ確認している。(1)「いう」「おもう」の条件形が素材になっている場合で、動詞条件形が接続助詞化したあと、さらに接続詞へ発達する。(2)「あげる」の条件形が素材になっている場合で、「あげると」「あげれば」が後置詞化し、そこから一部のパターンが接続詞化する。(3)「いえば」の場合、「そういえば」のように、ソ系列の指示表現とくみあわさって、本動詞の用法から接続詞化する。

ここで注目されたいのは、接続詞への発達には、二つの言語形式が関わっていることである。一つは、前方指示のための指示表現(主にソ系列)で、この形式の助けによって、その文とその前の文とがむすびつけられる。もう一つは、因果関係を示すときに使用されるような、関係のある二つの事象の存在を前提にしている表現である。以下、順に述べていく。

(1) 接続助詞から接続詞へ

まず、「いう」の条件形が素材になっている場合から述べる。すでに、上記の2.4.2で、「というと」「といえば」が接続助詞として用いられる例をあげている。このタイプの形式的な特徴は、従属文に疑問詞「なぜ」「どうして」「なに」が用いられることである。この場合、従属文の構造は、たとえば[[なぜ～(の)か][というと]]のように分析される。

ところが、従属文に前方指示の表現が伴われながら、先行する文との関係づけが行われると、例18、19のような「それはなぜかというと」「それは何かというと」のような三単語のくみあわせからなる接続詞ができあがる。

18) しかし私はケニアに対して、今でもいい印象を持ち続けている。**それはなぜかというと**、足は人々の目を見張らせる異形のものだったとしても、私の顔というのは典型的にアフリカン・ビューティだったからである。
(林真理子『美女入門』)

19) 「わたしは、いまの土方悦子さんの言葉にある種の興味をおぼえました。**それは何かとい**うと、殺害された藤野由美に関する行動の説明が自発的な

www.kci.go.kr

ものではなく、他の、星野加根子さんの発言によって、やむなく引き出されたという点であります。(後略)」 (赤川次郎『黒い森の記憶』)

さらに、「なぜ」「どうして」が用いられる場合、「なぜ」「どうして」がそもそも因果関係にある複数の事象の存在を前提にしていること、文末に「のだ」「からだ」「わけだ」のような≪説明≫のモダリティー形式が使われ、先行する文の存在を前提にしていることから、「それ」「これ」のような指示表現は省くことができるようになる。その結果、「なぜかというと」「どうしてかというと」のような接続詞が生まれてくる。

20) 学園祭が近づき、私たち女生徒は創作ダンスの練習に余念がなかった。「海」をイメージして自分たちが振りつけをしたものであるが、その日はみんな張り切っていた。**なぜかというと**、体育館でバスケットをしている男の子たちがなにかのはずみで全員見学をしていたからである。
(林真理子『夢見るころを過ぎても』)

21) 「(前略)今度は前よりもお金をたくさん持っているんです。**どうしてかというと**、奇麗になったおかげで率のいい仕事をできるようになったからです(後略)」 (東野圭吾『幻夜』)

次に、「おもう」の条件形が素材になっている場合について述べる。「おもう」の場合、2.4.2で「〜(か)とおもうと」「〜(か)とおもえば」が接続助詞として使用されることを確認した。その一方で、「そうかとおもうと」「そうかとおもえば」のように、前方指示のソ系列の形式が用いられることによって、くみあわせ全体が接続詞のように用いられる場合がある。

22) やがて落葉しだすと、近所のみんながきちんと清掃している。**そうかと思えば**、奈良市が植えたイチョウの並木道では、落葉の苦情が相次ぐ。
(毎日新聞010205・朝刊総合面)

このタイプから先行する文とのむすびつきが強くなると、前方指示の「そう」が省かれた「かとおもえば」「かとおもうと」の形が生まれてくる。

www.kci.go.kr

23) 母は目を赤くして、暇さえあれば放心していた。**かと思うと**、ヒステリックに私を叱った。 (三浦哲郎『忍ぶ川』)

(2) 後置詞から接続詞へ

この現象は、「あげると」「あげれば」の形の用法のみ確認している。「あげると」「あげれば」の形が接続詞化する場合、先行する文の内容に対して、その後続する文は≪例示≫の関係にむすばれる。この≪例示≫の機能をするための発達には、「例」という名詞(語構成要素でもある)が重要な役割を果たす。この「例」という名詞は、現実世界に存在する物事をさししめさず、ある事象が他の事象に対して、より個別的・より具体的な事象であるという関係を表している[10]。それで、先行する文の内容に対して、その文に述べられる内容は、より具体的で分かりやすいものであると、話し手が関係づけていることを明示していることになる[11]。

24) 自ら1988年に茨城県栖に高齢化対応住宅を建てた。**一例をあげると**、廊下に手すりが付いていたり、車いすで家の中を移動できるように段差をなくしたり、と配慮されているが、…(後略) (毎日新聞930202・家庭面)

25) 世の中には、家族・親子がそれぞれ生き別れになって生死も分からず暮らす不幸な人々がたくさんいる。**身近な例を挙げれば**、在日韓国・朝鮮人の人たちには、過去の戦争による犠牲者も少なからずいる。 (毎日新聞031015・社会面)

(3) 動詞から接続詞へ

この現象は、もともと動詞に修飾語がくみあわさったタイプから確認できる。(1)「さらに」「もっと」「ついでに」が「いえば」「いうと」と接続して≪追加≫の意味を表す場合(例26)、(2)「そう」と「いえば」のくみあわせからでき

10) 二つの事象をむすびつける方法として、指示表現や同じ表現を繰り返す方法があげられる。また、「あげれば」「あげると」の場合も、「勝因」「敗因」「要因」「原因」など、その語彙的な意味に事象間の関係が明示されている語彙を使うタイプがみられる。

11) 一言で接続詞化といっても、用法を全体的に眺めると、形式が単純化されながら固定していく経路をたどっている様子がうかがえる。この様子は、河(2014a)を参考にしていただきたい。

www.kci.go.kr

あがった「そういえば」が≪思いだし(想起)≫(例27)と≪話題の切り替え・導入≫(例28、29)を表す用法があげられる。

26) 金日成氏は平壌再建に当たって、ソウルのような街にしてはならぬと考えたのだろうと、私は想像した。整然とした、アジア的混雑を排した街を計画的に造ろうとしたに違いない。**さらにいえば**、日本風でもなく米国風でもない、独自の街造りを考えたと思う。 (毎日新聞910921・解説面)

27) 「あなたのペットの熊の縫いぐるみよ。どこへ行くにも手放さなかったじゃない。いったいどこへやっちゃったの？」/「**そういえば**、最近、見当たらないなあ」 (森村誠一『人間の証明』)

28) 「遠慮するな。俺はおまえの状態がだいぶ飲み込めてきた。プラナリアの危機と退社と独立の失敗、それと何よりも愛妻の扱いに困っている」/「困っている、ああ、そうかもしれない」/「**そういえば**、どうしてこの部屋に入ろうとしたんだ」/黒澤は動きを止めた。 (伊坂幸太郎『ラッシュライフ』)

29) 中で待っても構いませんか？」/「いいわよ。どうぞ」/「すみません」/三人組は勝手に知ったる何とかで、さっさと居間に坐り込んだ。/「**そういえば**、あんたたちのこと、泉さんから聞いたわよ」/「僕も泉さんから伺ってます」 (赤川次郎『セーラー服と機関銃』)

2.4.4 ≪陳述副詞化≫

動詞条件形から陳述副詞へ発展していく過程には、一旦、動詞条件形が何らかの形式とくみあわさって、複合的な陳述副詞の過程を経る場合と、動詞条件形のうち、かぎられた形式から発展した場合がある。

(1) 複合的な陳述副詞

ここでいう≪複合的な陳述副詞≫とは、動詞の「すれば」「すると」の形が何らかの形式とくみあわさってから、陳述副詞のような意味・機能をもつ形式をさす。

今までの調査結果をみると、「すれば」「すると」の形とくみあわさって複合的な陳述副詞として用いられる形式には、様々な副詞的な表現がある。その表現をまとめると、〔表6〕のようになる[12)]。

www.kci.go.kr

〔表6〕複合的な陳述副詞に使用される副詞的表現

いう	一言で、簡単に、大雑把に、大まかに、単純に、平たく / 正確に、厳密に / 正直に、率直に、はっきり / 強いて、あえて / 一般的に、全体的に、総合的に / 極端に、大げさに / よく、わるく / 逆に
みる	長い目で、長期的に / 全体として、全般的に、一般的に / 経済的に、遺伝的に / 今から、現在から / 後から、後で / 逆に
おもう	今、今から、今にして、今になって / 後から、後で、後になって
あげる	強いて / あえて / ざっと、～順に、順不同で

紙幅の制限のため、これらの形式のくみあわせを一々あげることは難しい。また、くみあわさる表現によって意味的な違いがあるため、本稿では、大まかな説明にどとめておく。動詞順に述べていく。

まず、「いえば」「いうと」とくみあわさるタイプは、話し手がこれから自分が述べる内容をどのように述べるのか、その≪述べ方≫を明示する。

30)「**一と言で言えば**、山本次官という人はお上手ものではない。実際一種の変人ではないかと思われるくらいぶっきら棒で無愛想で、(下略)」
(阿川弘之『山本五十六』)

31) ポーランドのボビンスキーという人が1953年に「競走馬のファイミリーテーブル」という本を出した。**簡単にいうと**、世界の競走馬の家系図だ。
(毎日新聞910419・総合面)

「みる」とくみあわさるタイプは、ある物事について述べるとき、どのような≪アプローチのし方≫で述べるのかを明示する[13]。

---

12) ここであげている例は、話し手の述べ方を示す観点から分類したものである。そのため、「逆にみると」のように、先行する文との関係づけが考えられる場合も含まれている。しかし、条件形から発達した形式をみると、先行する文とのむすびつき、話し手の態度、両方が読み取られ、接続詞と陳述副詞との間の厳密な境界線は引きにくい。たぶん、相対的に、接続詞らしさが強いものと陳述副詞らしさが強いものがあって、その間を両面性をもつ形式が埋めているだろう。

13) ただし、「今から」「後から」などとくみあわさる場合は、「おもう」が「今から「後から」とくみあわさるタイプと同様、過去時のことに対する評価・判断の改める態度を示す。

www.kci.go.kr

32) 消費に使われる援助は、緊急時に必要だが、**長期的にみると**経済の発展にあまり貢献しない。 (毎日新聞911123・社説面)
33) こうして石油情勢は**全般的にみると**安泰で、消費国にとって望ましい姿になっている。 (毎日新聞911129・社説面)

「おもう」とくみあわさるタイプは、過去時のことに対する判断・評価が当時にはされず、発話時か、過去の出来事時以後のある時点でなされたことを表す。

34)「学校にカッターナイフを持ってくる子がいることを保護者から聞いていたが、生徒の人権上の問題から持ち物検査は行わなかった。**いま思えば**、子供たちの実態の把握が多少甘かった」 (毎日新聞980129・夕刊社会面)
35) **後から思うと**素晴らしい作品なのですが、当時はあまり感動しませんでしたね。 (毎日新聞020211・朝刊解説面)

「あげる」とくみあわさるタイプは、これから自分がどのような態度で≪例示≫をするのかを明示する。「強いて」とくみあわさる場合は、質問の答えや代表的な例としては望ましくないが、話し手にとってもっとも適切であろうと判断したものをさしだす。「あえて」とくみあわさる場合は、会話における要求、コンテクストの要求に応じるために、同類の物事間の違いを捉えながら、もっとも適切だと、ふさわしいと話し手が判断したものがさしだされる。

36) かつて、「君は何か、長所はあるかね」と、上司に尋ねられた時、決まって「うーん」と悩んだ。そして、「**強いて挙げれば**、健康状態くらいです」と答えるのが、常だった。 (毎日新聞980408・社会面)
37)「七つの改革」のうち最も重要だと思うのは？/どれも大切だが、国民へのメッセージとして**あえて挙げると**、「公団などの民営化」、がんばる人を支援する「チャレンジャー支援」、弱者救済の安全網ではなく能力を強化していくための「人材大国」の3分野だ。 (毎日新聞010623・経済面)

www.kci.go.kr

(2) 複合的な陳述副詞から陳述副詞へ

複合的な陳述副詞のうち、「本当をいうと」「実をいうと」「正直にいうと」のような形式は、工藤(2000：231)に指摘されているように、会話文の中で一語化が進んでいる。この過程には、音韻的縮約、副詞的な形式の修飾語としての機能の喪失などによる形式の単純化が起こる。

38)「それじゃだめだよ、仕事なんだからなんて、私はいわないよ。**ほんというと**今けっこう苦しいから。だけどこのドキュメンタリーがお金になったら必ず配当するわ。マコトくん……」

(石田衣良『池袋ウエストゲートパーク』)

39)「仕方がないさ。疲れているからね。**正直いうと**、私も眠っていたんだ」

(西村京太郎『寝台急行「銀河」殺人事件』)

(3) 動詞から陳述副詞へ

「おもえば」「みれば」「みると」の形式の場合、文頭に位置しながら、話し手がこれから述べる文の内容をどのような方法で(回想によるものか、視覚活動によるものか)確認したかを示すときに用いられる。

40) パリもどこへ行っても、赤、赤、赤が溢れている。私はデパートへ行き、赤いセーターを何枚か仕入れてきた。**思えば**昨年の秋から冬にかけて、街はグレイ、グレイ、グレイだったっけ。 (林真理子『美女入門 PART2』)

41)「藤田さん」横から阿久津が声を出した。**見れば**、彼はすっかり裸になっていて、股間を隠すこともなく、バスルームへと歩いていくところだった。

(伊坂幸太郎『死神の精度』)

3. 結論と今後の課題

3.1 結論

以上、本稿では、動詞「みる」「いう」「おもう」「あげる」の「すれば」「すると」の形が、動詞らしさを失って、文法化、語彙化する場合を対象にして、次

www.kci.go.kr

のようなことを述べた。

(1) 脱動詞化するときの特徴

文の構造が単文になりつつ、動詞の語彙的な意味の抽象化・希薄化が起こる。形態論的には、語形が固定される。機能的には、他の形式に後接して、文法的な関係を表す形式か、話し手の述べ方を表す表現になる。

(2) 脱動詞化のバリエーションと脱動詞化の全体的な経路

動詞によって、脱動詞化した用法のバリエーションがみられるものの、共通的に、後置詞化と陳述副詞化がみられる。脱動詞化の全体的な経路は、動詞から多岐にわたって発達していくが、発達の経路は一方向的である。

(3) 脱動詞化の用法とその発展に関わる構文的な特徴

動詞条件形は後置詞、接続助詞、接続詞、複合的な陳述副詞、陳述副詞へ発達する。脱動詞化した用法の発達には、条件形が接続する前節要素の形式(名詞の格の形、引用構文、副詞的な表現など)、先行する文との関係を示す前方指示表現、複数の事象の存在を前提にする表現などが影響を与える。

3.2 今後の課題

本稿では、動詞条件形のなかでも順接な関係を表す形式を扱った。今後、「しても」のような逆接的な関係を表す形式、そして、条件形と同じく複文をつくるときに用いられる、中止形の文法化と語彙化について調べていきたい。

<参考文献>

奥田靖雄(1986)「条件づけを表現するつきそい・あわせ文―その体系性をめぐって―」『教育国語』87 むぎ書房 pp.2-19

www.kci.go.kr

言語学研究会・構文論グループ(1985a)「条件づけを表現するつきそい・あわせ文(1)—その1・まえがき—」『教育国語』81 むぎ書房 pp.19-31
_____(1985b)「条件づけを表現するつきそい・あわせ文(3)—その3・条件的なつきそい・あわせ文—」『教育国語』83 むぎ書房 pp.2-48
工藤浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」仁田義雄・益岡隆志編『日本語文法3 モダリティ』岩波書店 pp.161~243
グループ・ジャマシイ(1998)『日本語文型辞典』くろしお出版
小泉　保編(1989)『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
国立国語研究所(1964)『現代雑誌九十種の用語用字　第3分冊』国立国語研究所報告25
鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
高橋太郎(1983)「動詞の条件形の後置詞化」渡辺実編『副用語の研究』明治書院 pp.293~316
_____(2003)『動詞九章』ひつじ書房
河在必(2012a)「視覚活動を表す動詞「みる」の条件形の派生的な用法」『日語日文學研究』82-1 韓国日語日文學会 pp.599~618
_____(2012b)「言語活動を表す動詞「いう」の条件形の脱動詞化」『日語日文學研究』83-1 韓国日語日文學会 pp.429~448
_____(2013)「思考活動を表す動詞「おもう」の条件形の脱動詞化」『日語日文學研究』85-1 韓国日語日文學会 pp.343~363
_____(2014a)「転移動詞「あげる」の条件形の文法化と語彙化」『日本言語文化』28 韓国日本言語文化學会 pp.121~146
_____(2014b)「文法化した形式にみられる主観化 -類義形式「(か)とおもうと」と「とたん」の比較から-」『日語日文學研究』91-1 韓国日語日文學会 pp.521~539
_____(2015)「発話動詞「いう」の条件形の文法化と語彙化－「いうと」「いえば」が疑問文に接続する場合－」『日語日文學研究』93-1 韓国日語日文學会 pp.207~233
益岡隆志編(1983)『日本語の条件表現』くろしお出版
前田直子(2009)『日本語の複文 条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版
松木正恵・森田良行(1989)『日本語表現文型用例中心・複合辞の意味と用法』アルク
山口堯二(1969)「現代語の仮定条件法—「ば」「と」「たら」「なら」について」月刊『文法』1-2 pp.148~156
Brington, L.J and Trougott, E.C.(2005) *Lexicalization and Language Change*, Cambrige University Press.
Hopper, Paul and Trougott, E.C.(2003) *Grammaticalization 2nd Edition*. Cambridge University Press.

접 수 일: 2015년 12월 28일
심사완료: 2016년 1월 22일
게재결정: 2016년 1월 26일

www.kci.go.kr

<Abstract>

Deverbalization of verbal conditional forms in modern Japanese

: In case of verbal conditional form *'-ba'* and *'-to'* -

This study describes deverbalization, which is synchronically observed in conditional forms of verbs in contemporary Japanese. Here, deverbalization refers to verbs changing to other parts of speech while losing their lexical, morphological, and syntactic characteristics as verbs. Verbs from lexically represent motion or change in a person or an object, are inflected morphologically in tense, aspect, voice, mood, and polarity, and function as a predicate in a sentence syntactically. Perusing the usage of conditional forms of verbs, however, some of them have lost the various characteristics as verbs.

This deverbalization also refers to grammaticalization and lexicalization. Grammaticalization refers to the phenomenon in which in certain contexts or constructions, words that have autonomy loses their original lexical meanings and thereby transform into forms with grammatical functions — such as clitic, adposition, and affix. In this study, I have confirmed the phenomenon in which they develop into postposition, connective particle, and connective.

Meantime, lexicalization refers to a word going out of its original lexical category to transition to an element in another lexical category. In this study, I have verified that a speaker uses the form that derives from the conditional form of the verb in order to express his or her attitude with regard to the content of the sentence that he or she mentions. Specifically, there is change from a verb to a sentence adverb that indicates the speaker's attitude.

www.kci.go.kr